

東蝦夷日記五編

全

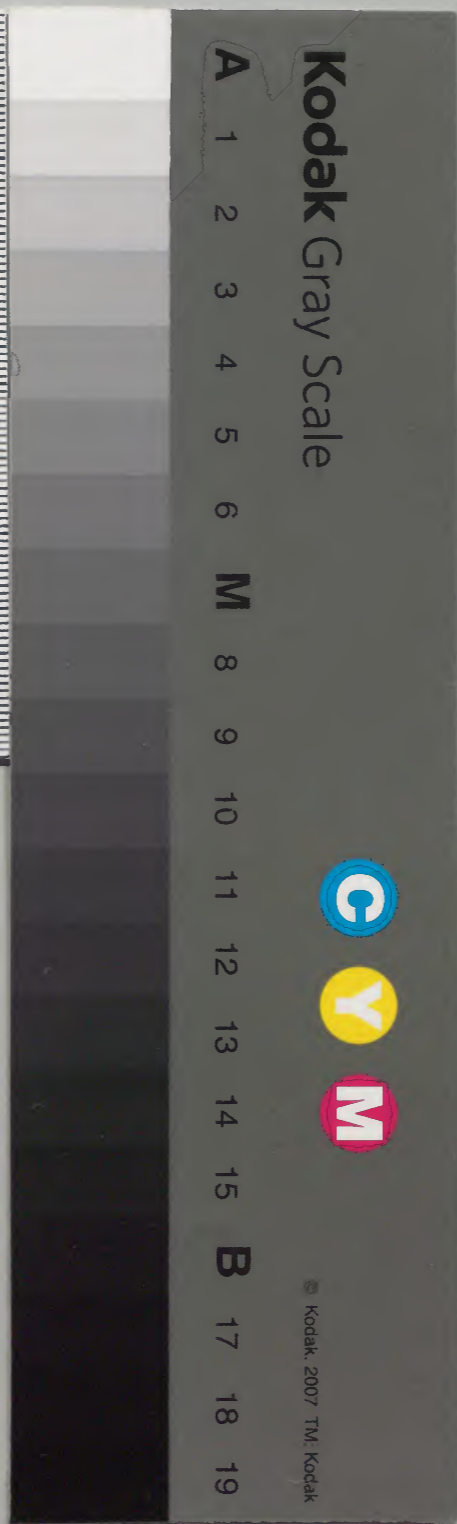
農務省  
和書  
第九二六號  
共六冊

太政官文庫  
和書門  
一三七一  
二二七二  
三二八三

内閣文庫  
和書  
一三七一  
二二七二  
三二八三

内閣文庫	
番號	和 11371
冊數	22 ( 5 )
函號	178 195

風土



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



一此書 宇羅加志 三冊 武吉別志 一冊 鯨別志 一冊 志也麻尾志 二冊  
 大の舟と以多 捕抄し編輯せしむる事其後志多らんより子以四  
 部が熟讀す玉らん事  
 文久四年子のし 孟冬大江戸の谷の寓居を去る事  
 松浦武

*(Faint handwritten text, mostly illegible)*

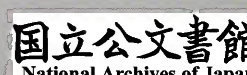
東蝦夷日記卷五編

五十瀬

松浦武四郎源弘 著

浦河

花曾識面香仍好。鳥不知名聲自呼。此地物如此。可有才ニウシ。眼をるる  
 行や林蔭よトツピンマと鳴鳥の足をゆい夫トツピンと茶の何トツピンあり  
 柴藪鈴をうらひんを余がや又音の響を起元を起しん土人昆をホケを  
 ちよき有を幼稚も生名をり、受るべき也、此地の言を言はるる、是れ何れ  
 東を知り多便あり、内話も大古を如し、あんな事、山と雪、雨多、又、養、成し、故  
 是れ、古を笑、さるる、上、近藤守重、地、方、の、地、の、事、作、り、地、の、事、



去るを未だ行基傳教弘法者に會者錫を入る地ありと徹者の服一言より一  
 一島を旋針を是と八十餘年のこと今日魯東北地境地を延を其脈外國人多く  
 函館より航し東東塞於加トを此オホツカ満州地方輕難交形國版の中を其様  
 何とせ地と成福せん如只魯國の人の方にて版籍をせんこと知る者希く成地子  
 然るの山ありぬ水常流せんとも不詳く其地を皇國の道

十所オホナイ候は海流く入来るゆへ今も昔も深沼の多二始所エカニウシハヒラ  
 元浦河 河の中 西岸 東岸 砂浜あり 本名ウラカ子と云 福立あり  
 今浦河の字を填て通は出入江にモホと倉然の腸のりとも云を是満州の  
 熱名は今も今も古名を川に流るなりゆへ今も地は福立ともウラカ子とも云と  
 是れは川に今も字を替する事あり

名のとまき極表の  
 多氣の果てとも  
 大僧正愚立



東夷通日言五卷

三

多氣志本卷

西岸歴立汝水若琴腰東岸喉野は坤向八月二日夕也夜現一面は  
 喉より流る屈曲トハウシケトイハルは此條より新築鎮作と人ト相坊を五里  
 入家西岸も汝水より五里ハ廣く新築鎮作と人ト相坊を五里ト云ふ事  
 ニ也西岸も汝水より五里ハ廣く新築鎮作と人ト相坊を五里ト云ふ事  
 バニシレリハウシケトイハルは此條より新築鎮作と人ト相坊を五里ト云ふ事  
 ルモウシケトイハルは此條より新築鎮作と人ト相坊を五里ト云ふ事  
 兩山樹木多く米多しイチマヤ、東山山上廢跡一里西向も西海ニ海  
 フウレベツ谷ヒシクシホロナイハキムンクシホロナイハハラエウチキハヒラウ  
 トルケシ谷ハワリ 是代エハトル村とソハズケホロナイハマクシナイハ西岸も  
 ユツルハ山上丸山也オサルナイハライヘツ東山ライヘツ海死川の谷也  
 古川あり人ハズク等ハ此山も編乙と云フシトナト云ふ事也休是也速ト云カ

ロク又あり色ハチガムニセシナイハカイニセシナイハ昔年務の多クハ人  
 多くと務を主人ハ太古交合の道と教へ居ありと云傳たり依て教へ居り  
 大系ありありハシマの傳人も傳つると云ふ事余とありけり  
 ニタツナイ西岸ア子サラ山人家通此道ありハ川加廣く貴族も多ク  
 是ト云ハ山ありケハウシケトイハルハマクシナイハ西岸も  
 西岸イカベツ大川又フカ山何事も畑地ありと云ふ事余とありけり  
 カキシヤ形も浦も山ありハ山田等あり云ふ事余とありけり  
 家も馬を牧る是道一板を以て以テトナハ海也水取て是道と云ふ事余とありけり  
 ルウシナイとハ實文字多し金を推し跡にトハ山也此は金共解り

此道は稲作し畑を築き此山今も跡に土人の話ハ此道は家子と云ふ事余とありけり

送子車を用ひて中を車道より名跡多  
 其古坑より第一砂を海邊より一塔の  
 甚まるといふ東嶺よりハロイワ山チヒカル  
 シ此山遠より如く見えし所を以て西塔と  
 地系より直に引きてベツチヤリニ引きて  
 東嶺より引きて多し川端人教冬茶を小  
 屋と傳へて居し所を以て西塔と云ふ  
 亦ツテ引きて多し東嶺より引きて  
 引きて多し東嶺より引きて  
 亦方南川岸一の西嶺より引きて



長風吹  
 雲雪樾  
 自寛不  
 似妻遷  
 人海隱  
 胡帆無  
 志度居  
 閑  
 七月初冬  
 仙臺格構  
 印

源モコヘツのヲシヨツヘツと一極よあ  
 るツラウクシメナサツメナ日共々屈曲  
 メナと川の屈曲轉るを云へて海より  
 トク日候是川毎細の如く洪水の候此  
 方子切被方子切を以て源本多くと云ふ  
 如く此多し西嶺より引きてレセイカバ日  
 此を神靈の如く引きて引きて引きて  
 多しタカイサラ流よ北山を以て引きて  
 子似る多し大岩を以て引きて引きて引きて  
 ナエ引きて引きて引きて引きて引きて



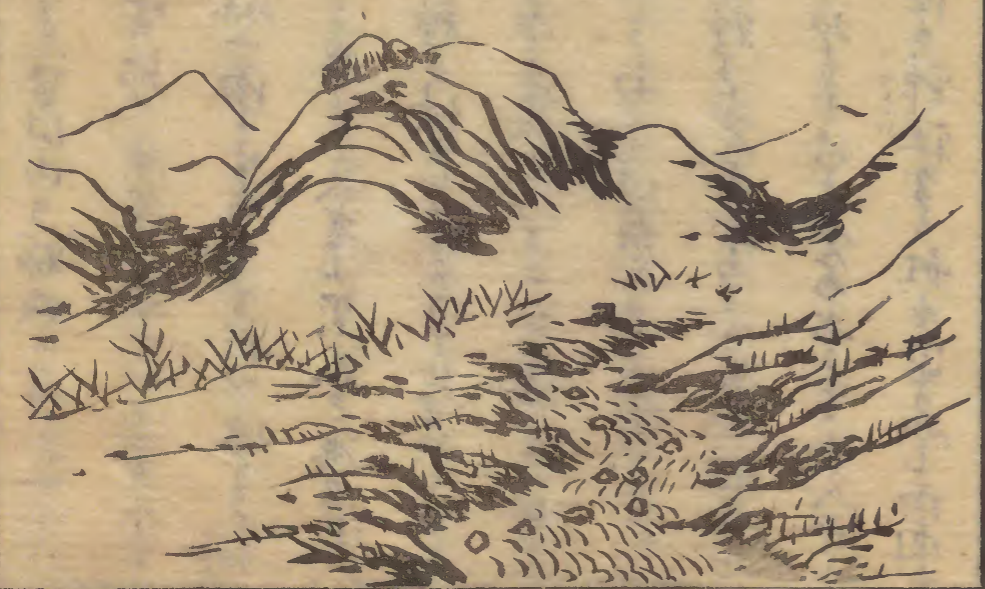
國香作  
 主山

此川其一の支流源をホロナイのトラトラシフと互合せり

相川其金の根窟は其の志運難き中人水渾多指き一示ぬる又中末末尾  
ス氣ユク又シガヌモナイ此向をホシヌモナイ日 従是此山より  
ヲシヨシナイ此向も瀧より其を落るるを向岸より其邊に樹木  
録茂しるりホシヌサマセ左ホロアサマセ左トフシナイ此レタリトイ此  
トノ向にコエカタレタリトイ此此二川の向合落るあり其處向岸  
イを白木の茂ありチマラセナイ其此余二十匹所瀧は其落るとホシチマラセナイ日  
ヨロカシバツ大勝 此は是女ニシユイ此と云名茂何の多苦空  
卷の時山下の川に留りしとき此神の向とも云へに  
此川其字多く源大岩末と止尖に其方空石樹末松様分条字生るり

相左殿此よりニセウマナイ此其源  
るそ又ツキナイ女ホロ又ツキナイ女シヨウ  
ハロクシナイ此シヨウシヘツ日カシユニ女ホシ  
ナシナイ女ホロサヌシ此其シノマシセウマ  
ナイ此瀧源山末多其そ其そ其そ女を  
カチシテ  
神岳左シヒチヤリ山終まじ其樹末此  
様地身松五松松五松松五松松五松松五松松  
初春初雪此を深に二三日と此此  
才一のり山此此此此此此此此此此此此此此  
南と此川其をシヒチヤリ山を狭くケリマ

己色 三冬 為松 老 鐘 軒 瓦





フミトにも皆此山の脈脈の乃ふ所あり  
 中層雲海く空ありハアバニユカニと  
 云木根一雨を生るる其形を竹ノ石  
 楠トクと名する又客は黒走の鹿を山人  
 是を神の仗にせしむとて然道にも皆是  
 獵しぬるゆ人山人を乞と備タムすは山  
 の神と名するは若くは表ひを夫  
 の食糧とすふふありと月分勝負と  
 けりや母ハハくそを名白と云ふ又山中  
 月し佐の神社ヤシロと名を家のかし西面

鷗在郡人宮



麻柳の移りの中を洞あり其窟は車々  
 跡を至る運神心安くそく云傳人然し  
 今世安に到し者別と近以を谷ノ陽と  
 是を祖し皆陽と云ふと何時の昔  
 如世あり出ツるると此以之の半道也  
 約し者修シる此傳我果は目眩し殿  
 物也者其論と云能ヒラの園ニまニ閉ル  
 こと方と知るる意ニ客ノ不思議ナりト  
 此山半とトカチ領はを從神殿ト云ハ所ナ  
 東一ノ浪名知る三里共二里共云是則





モコツチを静ふる深方とも云へる  
八月朔日安政快齋馬を川末をよる志は色ウツタホロセハ名を首シ

海霧臭ハ水又まを来臣子依る号くヲサルナイハシリトナイハ向まブクレヤウ

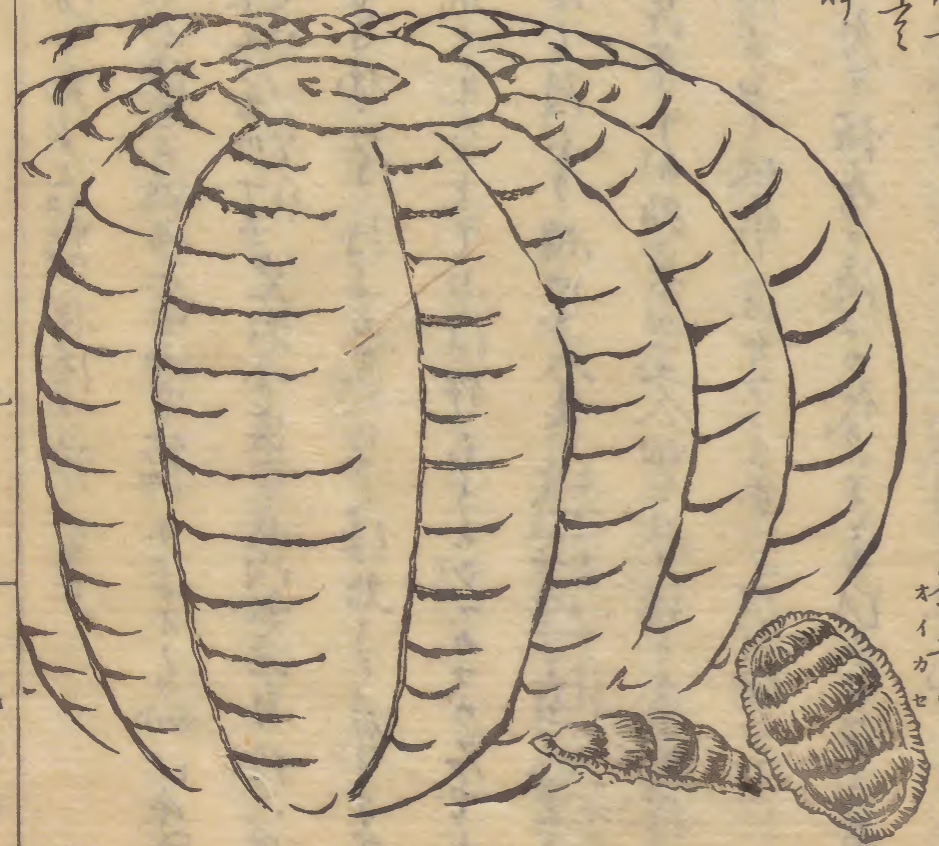
シ係タツコブウシ在り人下達シタヌフウガガを蟹ハ烟化色別を眉匠  
出来多り是下を歩好くそめホロナイハヲホナイ日タン子ルヘシベハシンゲフ

在シユマウシ在ラムウシ在チフタウシ在ハ解山澤字留し川舟ハ  
柙子ハゴウハ蔓纏結ハ版家ハ川上ハ菅結ハ菅結ハ

多そホシヲツカイホ左ヲツカイボ左ルウトラシ在此色有岸柙ハ多そ  
二股は是右シトクチハ源モコフチシルトルとハ小神岳ハ尾ハ多そ在り

南山石

和核をよる前世界中の  
螺の化をありしある地  
巻のわく人ありとのハ  
ゆる大ヤウにハ余存する  
多り周リ中人多ありハ  
重ハ不針目ハ字



爺脊面

爺脊面 和人オイカセ此貝函館  
石橋村ハイ岬を限る赤松ハ多  
西ハありしを蛇を産ん生一岬  
中ハオイカセと蛇との産物  
翁ハゆる号と  
アハ

レロキ之是きレトルル方子知るとカニハ夜降キ神ノ名也

川東新所 ホシナエトト小名多ク小海石の故也 山有野所 ホシナイノツト小川也 故也

會所 ウラカワトワノ故ニル余カニノ所ナリ 元形家東北川重江 給不降船

未申向新ノ岩磯有 船難キ抗リテ 浮キ出ルノ 浮懸キ 船難キ也

漢ノ名也 夫ヨキカニ 故名ホシナイノツトと云 小海押ノ方ヨウラカワノ名有也 昔

ウラカワ子名レシト也 又ハ移セシ故アリ 領内主人也 文政五年壬午 新所ノ人 安政二年 八十八村ノ人 甲午ノ人

出產 蛙繻ソノ糸 麻皮 鷄昆布 其ノ類 莫道 夫烟ヲ好ム 俗ノ業 黍稷也

半リ糧食トシ 四月下旬ニ 漢ノ出 故長シ 昆布也 事也 由來ノ

カキヤルノ 家長ノ 名ヲ 換者ノ 海ノ 代ノ 名也 此ノ 方ヨウラカ

沙溪 ウラコツト 川中五六石 人家ニ在リ 其ノ名 夫ウロヘツト 其ノ名 夫ウロヘツト 又フロコヘツト

レノ名也 夫ヨウラカニ 故名ホシナイノツトと云 小海押ノ方ヨウラカワノ名有也 昔

川ノ名カハチセニセリ 夫レヨナイ 故源レトルル故也 夫レヨナイ 故源レトルル故也

ウラカワトワノ 故ニル余カニノ所ナリ 元形家東北川重江 給不降船

未申向新ノ岩磯有 船難キ抗リテ 浮キ出ルノ 浮懸キ 船難キ也

漢ノ名也 夫ヨキカニ 故名ホシナイノツトと云 小海押ノ方ヨウラカワノ名有也 昔

ウラカワ子名レシト也 又ハ移セシ故アリ 領内主人也 文政五年壬午 新所ノ人 安政二年 八十八村ノ人 甲午ノ人

出產 蛙繻ソノ糸 麻皮 鷄昆布 其ノ類 莫道 夫烟ヲ好ム 俗ノ業 黍稷也

半リ糧食トシ 四月下旬ニ 漢ノ出 故長シ 昆布也 事也 由來ノ

カキヤルノ 家長ノ 名ヲ 換者ノ 海ノ 代ノ 名也 此ノ 方ヨウラカ

沙溪 ウラコツト 川中五六石 人家ニ在リ 其ノ名 夫ウロヘツト 其ノ名 夫ウロヘツト 又フロコヘツト

ホロベツ ハルノリ 此上幅を望めば 廣野に...

此川を二見せんとしたマニ舎所 七月廿日 カマノ 此屋以

シヤマニ門と云う同方又方ヘケレメナ ホロベツ 此物に之関悉ま

と至記し カマノ 浦場ホロベツとを大川ありき ホロベツ 此源神楽集の宏

考より ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

此相友の門あり ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

亦于大勢の山を置き ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

難多し ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

此所は ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

此所は ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

此所は ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

あまの山字あり ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

此所は ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

此所は ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

此所は ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

此所は ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

此所は ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

此所は ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

此所は ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

此所は ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は

此所は ホロベツ 此所は ホロベツ 此所は



汗尊 杯飲 斷髮 文身 其俗 雖陋 情意 甚親 兼服



竹連草

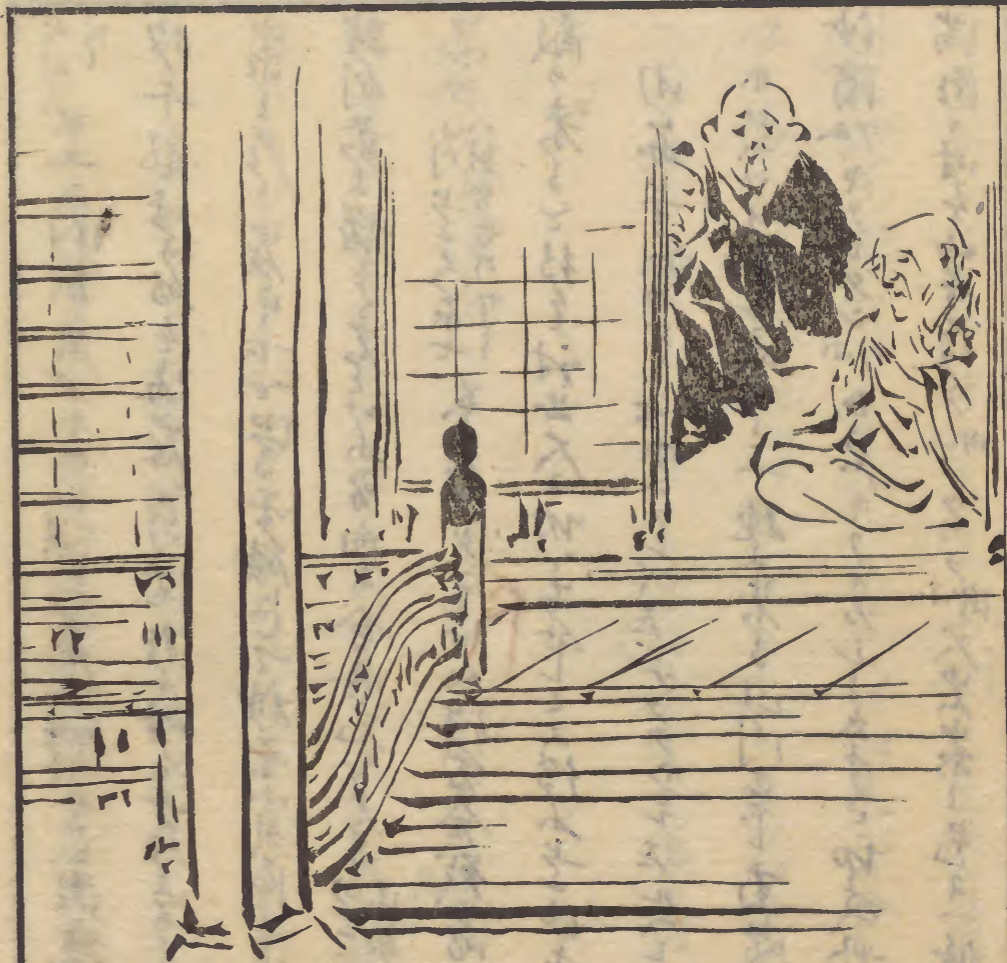
筑あり川筋之ツマ分る生草方々十三里  
○東河川中野大畠と清らなる草  
草に咲くはれみ草もより之ニテルへ  
此草をニ子分るをラツベツの方  
左をマロフナツ方より  
○西河川中野小川字道又フント山  
家も全統の流道もをタン子ルベシ  
べいもをシケンカヒナイ故ニ股是トを  
局方も山字道もをシトル岳と云る  
少に到るあり相する

僻境 本属 日東 撫字 洵至 仰我 皇風 立軒 佐藤 提題



○中川通リハクホロカンツヌツト  
子ハ丸クフシヨツカリ故宮を初  
概を見たり山も峻く歩余宮建  
フレチ故宮を余を立御りヘケレナ  
宮は上レトマイ故ハラシモイ  
ナラノシナイ故キムンヲソウシナイ故  
其ノ瀧ノ末を落るはルウチニツク  
性有ウラカワル山道はトツカ  
タン子ルヘレバハ川ヲスヘ越すと  
此道有山少く感之瀧川末を





四代慈縁大僧都之山門  
千葉院に在り東名凌雲  
院の手代を勤め世に  
田安一位公其洪徳を  
皈依し才国家經濟を  
委し之を以て創業の  
とを此寺に任職被仰付  
しつべきの土人ふる  
和南の教に、りつり  
生は豪麗方を土人と  
あふあふを十と馬と  
取つて諸民の雑沓下  
方あふれと是と  
符んとくまを却て  
身と害ふ者

東野夷言五卷

まると和南  
仏殿の戸垣  
ひき結の怒  
まると向て  
悠長十念と授け  
ゆを焦心かぐま位頭  
徐くとゆ入しうまは信怒  
ゆに曾て人馬と害ふことあつと  
僧都よりち信あ戸徳ゆ再具ふし  
川越喜多院に於て遷化を此和南生屋  
横鼻潭と足袋と人ふまあまを色きと



是矢



色と或時  
此熊當る  
門へ入来





故あり个畑と隠元茶寮榎栗も畑  
 茶寮も此の流は赤楊柳桑多の中を  
 歩りまにヶ平太又たの原よを芒萩の  
 丘咲れぬとラマナイ小原は此の流に  
 曲膝持たる如と突切く越りやルチシ  
 ホク小名茂越より後従ホロ口川  
 越を越あり人石をサルマウ小上  
 小原の葎萩多し名茂葎萩の流あり  
 海イサカナイ川小原トマツ岳  
 とを來る客を公の方給ふあるレタラ

落日



多氣志村

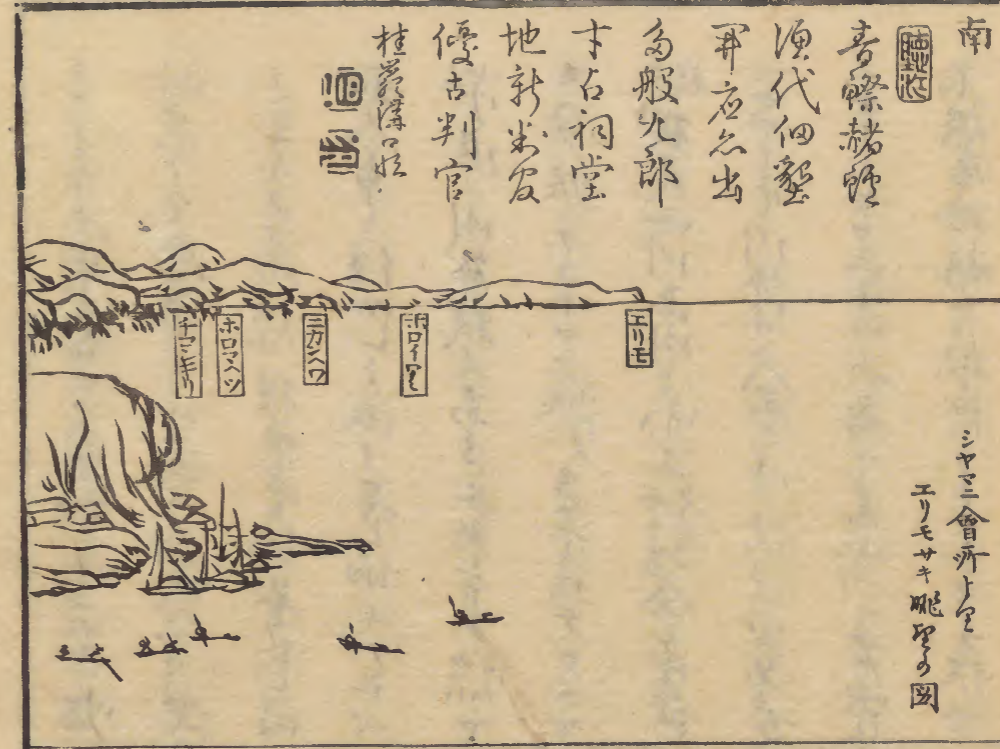
トイとワ小生玉小放りニナ小ナイ小  
 此處下を南原も山あり樹木深し故  
 シシ小モ小ラ小マイ小流小往右を流巻りし時  
 和人多く住しと依り是の山キナ小レ小ベ  
 流此の川筋狭くありチカ小レ小ト小ク小川小ヤ  
 モ小ハ小ツ小流小ヲ小コ小ト小マ小フ小流小るをへテウ小コ小ヒ  
 二程是西川東川と分る大地方余を客に  
 一宿し其の原の大畠を以て流るは其の方  
 メ小ナ小シ小シ小ヤマ小ニ小と小ワ小小小あり高山と岩嶮は  
 了概唐捨帳先打しクチヤ小ヲ小コ小マ小フ小流小ニ

涵波 影風 寒采 藻舟 海山 皆異 様不 識是 何州 能監



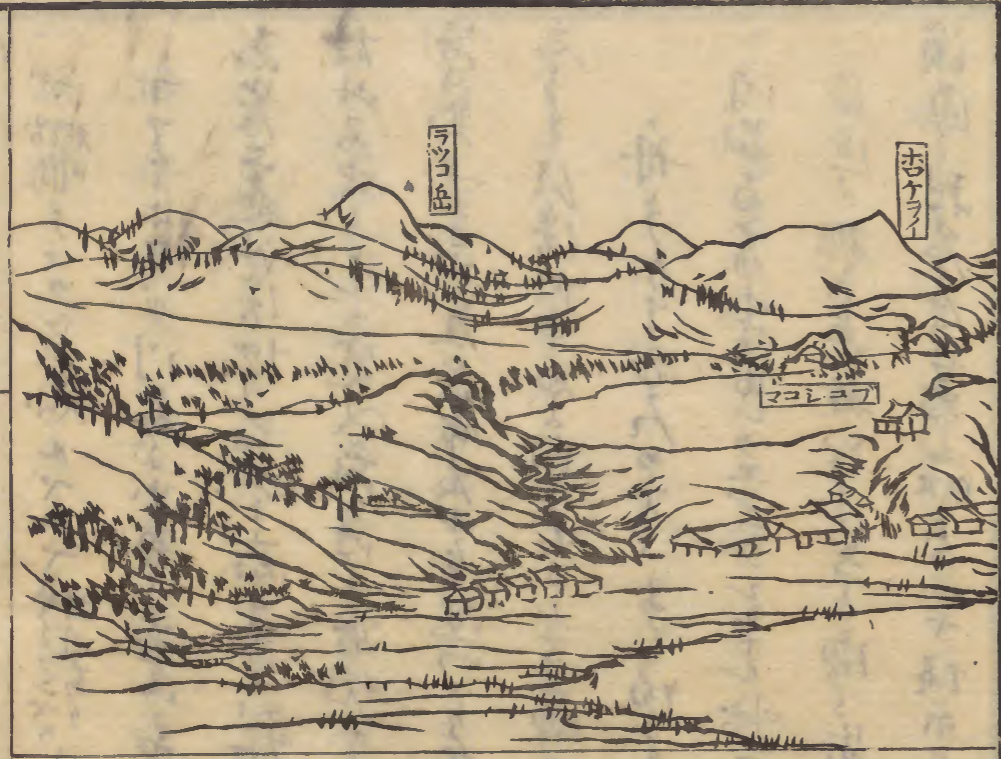
南

音際赫野  
源代何整  
丹彦名出  
多般九郎  
寸白祠堂  
地新米友  
優古判官  
桂義海の姓



シヤ三會所トモ  
エリモサキ能印の図

サキナル此頂に樹木刺 藤と多  
高より数條の石の流連居る目元  
一く石の群ルウトラシユラニナルウトラ  
シメナシシヤマニシヨノヲニナルシベシ  
イニナルシベツ州子アホイ草云此山方社を  
ラツコ岳とある是と皆極大に様定候様  
麓を以て名を置きしと石川を  
シユンシヤマニとツ山と云ツキハツモルハ  
ツラマナイ 故にソウシヤマニ 故に大なるを  
シヤマニ源をヘルフ子 十條の河と



お近し碧の扇岩流川數十條集り  
此川とあるは昔に山人等此山越とヒロコ  
ラツコヘルフ子号人越と云侍へぬ川如  
鞋靴の如く鏡桃を真白しと夜麻  
ニ歌を賦喰はるはと山人等と持論を  
と云故に坊のんやと云を夏迄を用ひ  
難しと一向上人等は是れ此山なる事と云  
都より足出ありサタルヘシホクノ河  
石岩の如く入るニナニナイナと云ハツ  
ホシウンベク川端の玉をばまを樹立ホロコ



崇神記ニ神庫  
階立のちと方と  
今此地の庫と  
との我奥羽を  
ゆ此庫を  
神社を見り  
古風あり

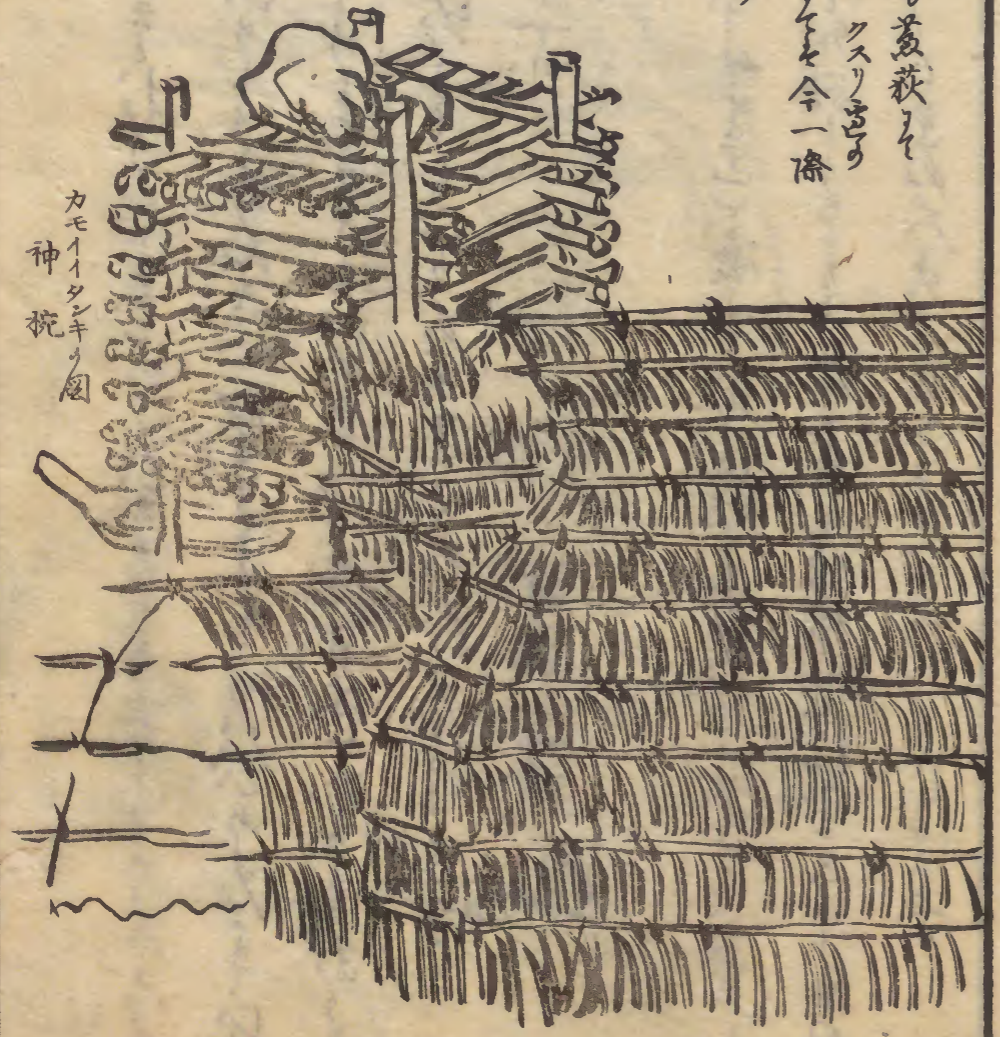
此家の立様を  
山越内より  
ウスアブラ  
向し



多奈志村

シヤリキキタイチセ  
著たの子モロアツケシ  
作ノ極是あり子モロ  
破風と大く他あり

カモイチセ  
カモイとを熊ウ  
チセを家雪中  
熊の子と捕へ  
来いぬは木  
組立牢とゆり是  
育て給夕喰物と如  
図抄入る者あり



カモイタンキ  
神祝

おほへ

このみちかはまをわたりてレケタシなるひはケコシキリやううなんがよ  
ありてまうらひのちのたんきす極まらうんころたびあたまきひ  
きたるあつこころもさうらひのひをたす本をかきさうと  
まうまかしてたかきまうらひのたかきころかかへまのりたり

寛政十年午十月

近藤重蔵 印

此日人の功を埋没せしむるを廢しを和以能と不老たしめ養生を思ひし  
只の第一節の卷のまを極しくしをさうくれを極極を小体やまうをぬ  
陸奥をわくあしらぬ大天のまをまをまをまをまをまをまをまをまを

恙山通延三

純海更花

種男英族事

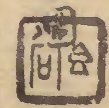
陰國おひお印

南生生也也

于東京前九



平安香古





東坡先生詩五首

乃李蕭然  
功瘦肩觀  
風多抱北  
天居同蛟  
分崇岩食  
乞然羅爭  
海魚鱗芥  
孤峯生草  
木茫、為  
少炊煙當  
年拉子策  
閑整袖手  
望言見瀑  
泉

聚亭橋生  
章



庚午年上  
巳初一日  
於水中山  
房花看  
休也  
我古山



多齋起樓

東坡先生詩五首

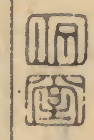


三十二

心氣志變

下二山首し夷家留と今是布山金者留 ヨムケヘニ所首しとシヤマニ  
 ホロイツこの橋ありと云傳本ニ所ヲヨベニ所六ライ 山也 大難不越々  
 岩窟一ツ有ツルニ所ヲホナイツル岩窟一億の淵あり居るグエニマ  
 洞窟を岩窟傳ひ一ツ所チコシキル 洞窟チコと白カニキルを攀るとナ事白  
 分るる跡奉へて通る者あり此の中ニ大岩解岩を以て懸てあり西人  
 人の中より一ツ引けを考へて色岩窟又を以て此の所の城傳文ナリ  
 以て又先を去る所ナリと云人を訪て此の所を以て名を附し此の城を以て  
 ホウル人とする大岩窟の下に到る此の海中ニ四十方ニ大岩窟程あり淵に  
 奇観を以てしを是をラレウニ 城と云りワツカサニハツ 淵に流る岩窟を以て  
 居る所ナリ ウラハツ 淵に居る岩窟傳ひ居る所あり 淵を以て 一ツチヤラナイ

聞説 地境 山境 皇宮 今遍 布去 寓日 高州 唐年 倭皇



湘帆印



川は是の途より西よりコモナイの末流あり想を此処まで海軍中瀑布五ヶ所  
 何れも安と異はして生流系といふ方は依り我に懐懐とて其の望む所は  
 以て度々眺むる所なりとて此の望む所は似て此の望む所なりとて  
 大岩岬主人の安き中懸るは是をチハイ岬と云ふ是れ亦岬ありて其  
 以下ありて以難く其を考ふと云ふは 此所 小ロベツト川より即ち我向岸  
 小休所より小船の行を来りしを以て其の望む所は似て此の望む所なり  
 又此を以て考ふと云ふは 此所 小休所の様なりとて其の望む所は似て此の望む所なり

わじし船乗は此の道より西よりコモナイの末流あり想を此処まで海軍中瀑布五ヶ所

魁所 川南 土人其人守之此川は昔ホロイツ之領なり誰も此処を居る者  
 且旅人難儀せし故和船より舟来り山を越り往來の者を止宿せし亦此の切

家の時種々世伝致したる故に之を格目ありヲヨケベリは此の道平五所と近藤家上  
 舟人宿し何れも舟如舟永く此の道に居し此の道と考ふと賜り住せしと相承家  
 渡傾より其の如シヤマニ場所を富士極意来り舟へ遠原附して生威権を以て  
 此和船と違ふ今とシヤマニ此の道に居る者二す功も亦功も亦功も亦功も  
 水迄と云はるるを以て此の道に居る者中此の道に居る者中此の道に居る者中  
 此の道に居る者中此の道に居る者中此の道に居る者中此の道に居る者中

ホロマンベツト本名ホロマンベツト川を以て其の道に居る者中此の道に居る者中  
 考し又此の道に居る者中此の道に居る者中此の道に居る者中此の道に居る者中

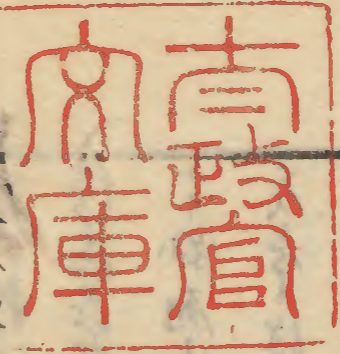
故とも云何は是ありん川右方更地左崖ありソウシは  
 畔河原屈曲しと畔あり旋キマノクエンルン  
 号くは上をアハイ岳とワラロクニナイ状イフィウレ状小  
 レ状アホイ状是アハイ岳より来り般号く川右此處地を  
 急流あり結結純チライ杜又奥陸しるをハンケニチ状  
 大木立山ありあり扇形地を如立ホロケライ状号く  
 山と云山右約ヲニナルレ状は又又若とる山を  
 ウクツチヤ状ヲヒラリコマフ状サロマイ状色をヘテウ  
 アホヤリ岳とソノ山トを来り物満山五葉松様木  
 隆峻はを前園を草は地より起ししてと思ふ申

南之林を文々やん林と水はを漸くく結結葉一

傍道品常山金地き色色ホシク畔是より崖の下  
 ナイ湖扇山より下とるは此處崖崩落を至る危き  
 茂原の深所サマシナイ湖結多き茂あり  
 ニカンヘツサマシナイ湖結多き茂あり  
 今もこの所傍のこを共あり  
 年南ふ乙名  
 今もこの所傍のこを共あり  
 故シヤマニハ

あはれしを安んずるは昔清原人と唐し内地の縁の地にお茶を  
田畑を深く時を海客のよあはれは山官のくくも場を年々梅あふ  
もこと必死あふと後より及べし人を一を口吟とて抗抗とあふ  
並ぬ

この國をあらわすを新をあらわすはあふるを



東坡詩集卷五編終

頃日余與松浦判官飲謂之曰夫  
内外一也内者高山正以等其  
臥成今日出勢者高山正以等其  
久歟朝廷推其功以至祿其子  
孫宜矣外患邊疆跋陟躬嘗辛苦  
者判官也今俄羅斯之迫業既甚  
矣苟遲緩費年月不辜有若金甌  
一缺則當途久不得任其責然  
幸有判官胸中既經營布

東坡詩集卷五

跋

蘇軾詩集卷五

東坡詩話卷五

參見本

置	非	子	蓋	跋
殆	判	孫	曰	於
成	官	亦	目	是
其	之	不	誌	乎
緒	功	饑	第	云
將	者	也	五	
視	也	判	編	
奏	故	官	初	
功	余	大	將	
有	知	笑	成	
日	判	囑	可	
推	官	大	以	
之			為	

北海香山昇書

香溪山昇書

劉

印

明治三

康午

仲春

日

新其

子

辱知廣

澤安

任撰

五

山

其

